

# 早稲田台湾通信



## 目次

- 1.論説「呉鳳伝説、霧社事件そして『サヨンの鐘』」
- 2.論説「霧社紀行」
- 3.論説「台湾新仏教の行脚」
- 4.シンポジウム報告
- 5.書評
- 6.出版のお知らせ
- 7.台湾文化週間開催

## 論 説

呉鳳伝説、霧社事件  
そして『サヨンの鐘』  
下村作次郎



この6月に「日本統治時期台灣文学集成」（第二期・全10巻、綠蔭書房）の一環として『「呉鳳伝説」関係資料集』「一」「二」と『「サヨンの鐘」関係資料集』が復刻・刊行された。筆者は、これを機に9月11日、国立台灣文学館（鄭邦鎮館長）で「連結する帝国の物語—呉鳳伝説、霧社事件そして『サヨンの鐘』—」と題して講演を行った。呉鳳伝説と霧社事件との関係については、駒込武が「植民地教育と異文化認識—呉鳳伝説の変容過程—」（『思想』、1991年4月）のなかすでに指摘している。

嘉義市にある呉鳳廟は、最も早くは清朝時代の嘉慶末年（1820年）に建立された。領台後に、この呉鳳廟に關注を寄せたのは後藤新平である。後藤は、民政長官時代（1898年—1906年）に阿里山を巡視した折、呉鳳廟を見て、顕彰碑を建てようと思い立った。しかし、まもなく南満洲鉄道会社総裁

として転出したため実現しなかった。後藤のこの呉鳳顕彰計画は、その後、呉鳳廟改築事業となってあらわれた。駒込論文によると、この事業は総督佐久間左馬太が推進した「理蕃五カ年事業」（1910年—14年）と「密接にリンクして」、1913年に嘉義府長の津田教一によって成し遂げられている。呉鳳廟改築事業は、1931年にもう一度行われた。この二度目の呉鳳廟改築事業について駒込はまた、「老朽化した廟が補修され、呉鳳廟改築委員会による『呉鳳』が出版された」とは、「総督府を震撼させた1930年10月のタイヤル族による霧社蜂起と決して無関係ではないだろう」と述べている。呉鳳廟改築委員会発行の『呉鳳』（1931年1月）には、編纂過程のなかで霧社事件の影が落ちているとみると自然だろう。該書は、金文字で「呉鳳」と書名され、布張りの豪華な装丁に仕上げられている。さらに、該書から呉鳳に関する部分だけまとめて普及版『呴鳳』（1932年7月）が作られ、呉鳳廟事務所より出された。呉鳳廟改築事業は、霧社事件発生以前に計画されていた点を考慮すれば、事件との直接の関係はみられないが、しかしその事業のただなかで、「模範の蕃社」といわれていた霧社において、理蕃事業に徹底的打撃を与えるセイダッ

カの抗日蜂起事件が起こったことは、総督府や嘉義支庁、さらに理蕃関係者に、この事業へのいっそうの強化と取り組みに奔走させたことは疑いがない。「サヨンの鐘」と霧社事件には、どのような関係がみられるのだろうか。簡潔に述べると、一つは、映画『サヨンの鐘』のエキストラには、桜社（現、南投県仁愛郷春陽村）のタイヤルの人々が出演しており、ロケ地にはこの霧社に近い桜社が選ばれたことである。桜社は、霧社事件で武装蜂起に加わったホーネー社の人々が住んでいた部落であり、花岡一郎夫妻、二郎夫妻は、ここの出身である。事件で生き残ったホーネー社の人々は、霧社から遠く川中島に強制移住させられ、ホーネー社の跡地には、理蕃警察側についた「味方蕃」のタウツア社の人々が住むようになっていた。映画『サヨンの鐘』は、このような因縁のある地がロケ地に選ばれ、桜社のタウツアの人々と霧社分室が協力して完成した。もう一つは、キャストの名前である。サヨンの恋人サブロは、日本内地留学帰りで、花岡一郎、二郎を継いでエリート教育を受けた人物として設定されている。サブロの恋敵のように描写され、またサブロとなにかにつけて競争相手となり、印象悪く描かれているナミナの恋人モーナ

は、その名前からモーナ・ルーダオを連想させる。

このように、呉鳳および「サヨンの鐘」の物語化は、総督府の理蕃政策の一環として行われているが、物語化の過程には霧社事件が色濃い影を落としていた。駒込武が指摘するように、呉鳳伝説は台湾総督府が「漢族向けに教材化」し、「さらに文部省により『内地』及び台湾の日本人用教材に採用され」、さらには朝鮮総督府発行の教科書にも取りあげられたが、霧社事件発生後はいっそうその役割が強調されていった。日本統治時代にあっては、呉鳳伝説は、ツォウ族の首狩りの風習をやめさせることを目的として、原住民族向けに教材化されたものでは決してなかったのである。

「サヨンの鐘」は、一人のタイヤル族の少女の水難事故が、偶然にそして為政者にどっては都合よく変容し誕生した物語であったが、高砂義勇隊が生まれるによんで、「サヨンの鐘」の価値がいっそう高まり、物語化が強化されて国策映画が作られた。こうして呉鳳と肩を並べるほどに、人のため、國のため犠牲となつてつくす物語に急成長をとげた「サヨンの鐘」は、日本敗戦前夜の1944年に総督府国民学校教科書に採用されるにいたった。

背後には、当局が、呉鳳伝説、霧社事件そして『サヨ

ンの鐘」を強力に結びつけ、漢民族も原住民族も帝国の物語の連環のなかに連結させようとする強い意志が働いていた。

(天理大学教授)

## 論 説

霧社紀行  
春山明哲



埔里を出発した車はゆるやかなカーブを何度も曲がっていく。次第に両側の山が道路を狭めるようにそそり立ってきて、霧とも小雨ともつかぬ水滴がフロント・ガラスを濡らしていく。お洒落なサングラスをかけたヤユツさんの運転は快調だ。彼女は京都大学で学ぶセイダッカである。後ろの座席でダキス先生が説明を続ける。先生の祖父はマヘボの戦士だった。やがて車は峻険な山間の、眼下に谷底を望む橋にさしかかる。「人止門」である。昭和5年10月のあの日、蜂起したセイダッカの青年達は、確かにここまで来て前線を敷いたはずだ。そしてなぜか引揚げた。彼等は後退し、霧社の奥の険しい高地で、祖先癡祥の地で戦うことを望んだのだ。「内地観光」したモーナ・ルーダオら蜂起の指導者は「赤い頭」の日本軍の力を知っていた。祖靈にして神である「ウットフ」の目に恥かしくない死こそ誇り高い生なのだ。セイダッカの掟にして、社会規範かつ道德律である「ガガ」が彼等の戦いをどのようなものにしたのか。ダキス先生の語りは、30年も前に読み

進めた史料の地図平面を、立体的な軍事地理学の現況報告に変えつつあった。

2007年9月9日、台北での「台日学术交流国際会議」終了後埔里に向い、その夜は眉原泊、翌10日から11日まで霧社一帯を回り、同日夜埔里に戻った。これが私の「霧社紀行」の日程である。短いが、感動と刺激に満ちた楽しい旅だった。そして肅然とした気持ちが胸を充たす鎮魂の瞬間もあったような気がする。

眉原の下山誠さんの民宿では、日本人慰靈塔の頭部と下山家の墓所を、「川中島」(現清流)ではオビン・タダオ(花岡初子)とビホ・ワリスの眠る高家の墓所をお参りした。タダオ・ノーカンとダッキス・ナウイ(花岡二郎)の「墓」も建立されていた。遺骨ではなく、あの「花岡山」の土を持って来たのだと埔里の＜とgt;(登+オオザト)相揚さんは言う。翌日、その「花岡山」をダキス先生は案内してくれて、私は眼下の「古墳」のようなこんもりした森に眠っているだろうダッキス・ノービン(花岡一郎)達に手を合わせた。無用な感傷と思われようと、私が今頃になって霧社を訪れたのは「お墓参り」なのである。なぜならここは「戦場」だったからだ。

それにも関わらず、多くの日本人が霧社事件にひかれる訳が少し了解できた。ここには、「物語」があるばかりではなく、山岳風景があり、温泉宿があり、渓谷があるので。つまりは「日本」の雰囲気である。

埔里では「全員」が集まつて、台湾の料理と酒に沸いた。下山さん、＜とgt;さんご夫妻、ダキス先生、ヤユツさん、仁愛郷公所の孫さ

ん、東海大学の先生と学生の面々。この「全員」の意味をこの少ないスペースで説明するのは不可能である。霧社事件の「物語」の細部を説明しなければならないからだ。「ウットフが織り給いし人々」と出会った夜であった。

(台湾研究所客員研究員)

## 論 説

台湾新仏教の行脚  
西川潤



この九月初めに、社会参加仏教国際ネットワーク (International Network of Engaged Buddhism-INEB) の世界大会が台湾の桃園にある弘誓学院で開催された。この学院は台湾仏教界が尼僧を養成するための大学である。参加者は静かな田園のなかの大学寮に宿泊して、朝六時の太極拳、黄金の仏陀像の前でのお勤め、瞑想、精進料理の朝食にはじまる二泊三日の日程をこなした。

会議の後、四泊五日で台湾の北から南まで、台湾「新」仏教界を訪ね歩くツアーがあった。このツアーではこれら仏教諸流派の指導者たちと対話をする機会があつたので、台湾仏教界の動向がよく読みとれた。

台湾では清朝時代以来、仏教の寺院は各地に散在したが、基本的には道教や觀音信仰、それを換骨脱胎した媽祖信仰等の民俗信仰が強かった。日本時代には國家神道と共に日系の大乗佛教(浄土宗、曹洞宗等)も入ってきたが、民間信仰に

取って代わるようなものではなかったし、台湾の風土に根をおろすこともできなかった。第二次大戦以降、国民党政権が大陸から乗り込んでくると共に、大陸佛教関係者も多数台湾に亡命し、それが教義的にも、また指導者層からも、今日の台湾佛教の骨格をつくったことは疑いを入れない。

しかし、台湾で今日の「新」仏教諸派が急速な展開をみたのは何と言っても1970年代以降の「高度成長」期である。この時期に入びとは、急速な社会変化に翻弄され、心の支えを切実に必要とした。まとまった教義や指導者層を欠く民間信仰はそれを提供することができなかった。それゆえ、台湾佛教はこの時期に「人間(じんかん)佛教」として蘇った。佛教の教えはもともと、個人が悟りを得る道を説く。従って、社会的な問題への関心は少ない(上座部佛教)。だが、台湾の場合には、大乗という起源もあり、人びとの心の悩みに応える教義と実践として発達した。それが、「人間(じんかん)」の意味であり、現世から逃れるものではなく、人びとの間に佛教の倫理を確立して望ましい社会をめざそうとする教えとして現れた。つまり、台湾新佛教はもともと「社会参加佛教」として発達してきたのである。

1970年代に現れた仏光山、慈濟、また、1980年代の法鼓山、中台禅寺、靈鷲山が台湾の五座山と言われる主要な佛教諸派をなしている。台湾の佛教徒は最近20数年間に約500万人から1000万人へと倍増したが、この佛教拡大の担い手が五座山である。

私たちは、台湾北端の金

山に位置する法鼓山に始まり、新竹の玄奘学院、台中の菩薩寺、南下して高雄の仏光山、台北郊外の慈済病院、靈鷲山系の世界宗教博物館を歴訪した。私は四月に花蓮市の慈済会本部を訪ねているので、五座山のほとんどを今年お参りすることができた。

これらの寺院、仏教施設を訪ねて、台湾仏教のダイナミズムの一端に触れたわけだが、私にとって台湾仏教は次のような特徴をもつと見えた。

第一に、その多くは、禅の影響が強い。五座山の開祖はみな大陸の臨済宗の太虛、印順両和尚（この人が台湾に渡った）の法統で禅の流れを汲んでいる。慈済会の開祖証嚴法師（この人のみが台湾出身）も印順和尚の弟子である。法鼓山では滝を背景とした巨大な観音堂に瞑想の道場があり、民間信仰と禅の結合を感じさせた。高度成長期に禅を組み、瞑想のひと時を過ごすことは人びとに心の安らぎを提供したにちがいない。

第二に、二万人と言われる台湾の比丘、比丘尼の四分の三は女性であり、しかも学歴の高い女性が多い。彼女たちは、学業を修め、社会で活躍を望むが、伝統的な男性優位の仕組みを残す社会のなかでは必ずしも彼女たちの働く場が保証されない。かといって家庭の中に入って夫に仕えることをも望まない。こうした女性は仏教組織を通じて社会にサービスすることを選ぶ。今日台湾最大の仏教慈善組織である慈済会は前述の証嚴法師（尼僧）の下に約二〇〇人の尼僧の委員会によって指導されているが、「慈善・教育・医療・文化」をセットとした社会奉仕（愛

の教え）を通じる生活革新、N G O 運動であり、そこに出家や在家の女性が集まる。主婦のボランティアも多い。慈済会が「主婦の宗教」とも称されるゆえんである。彼女ら尼僧やボランティアの働く姿は驚くべく生き生きとしている。

第三に、台湾仏教はあくまでも正信仏教であり、戒律、瞑想を通じて智慧にめざめることを重視する。出家は結婚せず、戒定慧の教えを守り、精進料理（素菜）を食する。日本で精進料理を口にすることは難しいが、台湾ではどこでも素菜にありつける。ついでながら、台湾は世界でおそらくもっともバラエティに富み、美味な素菜を口にすることのできる国である。その見本は世界宗教博物館のカフェテリアで見られ、このカフェテリアのお値段にくらべた精進料理の量と質は疑いもなく、世界ナンバーワンである。

第四に社会との接点が広く、理論的にも高い。台湾のケーブルテレビは一〇〇チャンネルほどあるが、その内五チャンネルは仏教のテレビである。仏光山は「市民社会」専門のテレビ局まで運営している。また五座山はいずれも大学や研修場を持ち、多くの学徒を教え、教育を重視している。弘誓学院の創立者昭慧法師（尼僧）が、I N E B会議で「縁起、護生、中道—仏教倫理学と戒律学の統合理論」と題する講話を行ったが、仏教の根本の教えとしての縁起と中道の学説から発して、「生命の養護」を仏教倫理の中軸に置き、環境保全と動物愛護を説く、きわめて現代的で独創性に富んだ、しかも女性らしい問題提起で、私も聞いてい

て舌を巻いてしまった。

第五に、僧侶と信徒の間に、いい意味でのパートナーシップ関係が成立している寺院がある。私たちの訪ねた菩薩寺は台中市内の小さな、しかしほどんとした建築のお寺だが、4人の僧侶が信徒たちと連携し、毎月、音楽会やお茶の会、談話会を開催し、信徒参加の下に街活性化の中心となっている。私たちの訪ねたときも、信徒たちが、プログラム、イベント、炊き出しと取り仕切っていた。

このように仏教関係者が、毎日お経を唱えるにとどまらず、仏教精神を現代的に再解釈し、現代世界に生きる私たちに問題を投げかける姿勢を持つかぎり、台湾仏教は今後もますます発展する強靭な生命力を持つ、と私には感じられた。

（台湾研究所顧問）

湾史の再検討を踏まえ、日本統治時代の台湾に対する影響を検討しなおそうとするものである。これにはもちろん、国民党統治下の学校教育で、日本統治が暗黒時代であったかのように描かれていた事態への反省を見直しが、1990年代後半の歴市教科書再編（『認識台湾』1997年）以来、急速に進んでいる知的情况を反映している。

全体は4部会に分かれた。第一部「社会変化と現代化国家」では、鄭欽仁（国立台湾大学名誉教授）の司会の下に早稲田大学台湾研究所の春山明哲、浅古弘の両氏が、それぞれ「後藤新平の台湾統治論・植民政策論」、「岡松參太郎と台湾法」について報告を行った。

第二部「経済発展と近代化」は、同じく台湾研の西川が司会を担当し、九州産業大学の朝元照雄「植民地時代台湾の農業統計と近代化」や任耀廷（淡江大学日本研究所長）「植民地台湾の経済発展と教育」等の報告があった。

第三部「台湾文化と主体意識」では、藤井肖三（東京大学）、河原弘（成蹊高校）、邱若山（静宜大学）らが文化面での台湾人意識覚醒と日本統治の関連を扱った。

第四部「近代化と台湾意識の発展」は、藤井教授の司会の下で、小風秀雄（お茶の水大学）、林呈容（淡江大学）、汪明輝（台湾師範大学）らが、日本と台湾における民族アイデンティティ形成の問題を比較検討した。

最後のパネル討論では、許世楷（台北駐日代表）、下村作次郎（天理大学教授）、李永熾（国立政治大学）らが、四部の報告、質疑応答

## 報告

### 亞東關係協会主催の台日学術交流国際会議



2007年9月8、9の両日、台北市の国家図書館国際会議場で、亞東關係協会主催の「台日学術交流国際会議」が開催された。今年で3回目になるこの学術会議は年々盛況になってきており、今年も最後まで満員の聴衆が会場を埋めた。

今年の主題は「植民化と近代化—日治時代の台湾を検証する」で、近年、台湾で盛んになってきている台

を踏まえて、植民化と近代化の関連、緊張関係について熱心な討論を行った。

日本側報告の中には、あまりにナイーブに殖民化＝近代化とする報告も散見されたが、張炎憲・国家図書館長が最後にまとめたように、台湾側がはっきりと、日本がインフラ、法制など近代的な国家体制の整備を行い、その歴史的な意義は評価されるにせよ、「精神の近代化」はむしろ、日本統治に対抗して台湾人の内部から打ち出されたもので、必ずしも植民化＝近代化と見ることは正しくないとする見解を打ち出したことは、会議にビシリと筋を通した。

3年前の第一回の会議は日本語で行われたため、参加者には知日シニア世代が多くいたが、昨年から同時通訳が導入されたこともあり、今回はシニア世代に交じり、若い世代の人びとがずいぶん参加するようになった。これは、日本と台湾の知的交流の将来にとってたいへん心強いことだった。

（文責：西川潤）

## 報告

### 台日市民フォーラム

2007年6月16-17日に台北市で第一回の「台日市民社会フォーラム（論壇）」が開催された。

このフォーラムは、昨年12月に早稲田大学台湾研究所の西川が台湾環境保護連盟に招かれて、出版準備中の『東アジアの市民社会と民主化』（「台湾研究叢書」の第1巻として2007年2月に出版、書評は『台湾通信』第6号掲載）の研究内容等について一連

の講演を行ったことに始まる。その機会に台湾NGOの側から、日台市民社会の連携を強めたいとの要望が出され、今回のフォーラム開催の運びとなったものである。

この会議は「草の根ネットワークをどう構築するか」をテーマとし、台湾側から20、日本側からは18のNGOが報告を行い、参会者は連日200人を上回る盛会だった。李登輝前總統、謝長廷前行政院長の来賓挨拶に続いて、羅福全（亞東關係協會）会長の司会の下に、蕭新煌（中央研究院アジア太平洋地域研究センター所長）、西川潤（早稲田大学台湾研究所顧問）・上村英明（恵泉女学園大学助教授・市民外交センター代表）による基調報告があり、その後、各団体の自己紹介と「NGOの現状、課題と展望」に関する意見表明が行われた。2日目は「地球温暖化防止」「グローバリゼーション時代の教育、文化、就業、農業問題」「エイズ予防と治療」「世代間構成の変化（少子高齢化）」「NPO／ボランティアの国際交流」「青年理想主義の実践と課題」の6つの分科会が各30-40名の参加者を集めて開かれた後、再び全体会議で「三大部門間の協力と協働をどう促進するか」について討議が行われた。

この会議で、台湾のNGOの勃興しつつある力量が遺憾なく示された。温暖化等の環境問題、住民の環境保全、外国人労働者への支援、エイズ対策、少子高齢化時代の子どもの人権と高齢者支援、災害等へのボランティア活動など、身の回りの社会・環境問題に市民団体が幅広く取り組んでい

る実情がよく分かった。多くの学生たちが「親善大使」として、会議をボランティアで手伝った。

反面、台湾NGOは、日本NGOが行っている国際活動と国内活動のリンク（開発教育、地域通貨、フェアトレード等）により刺激を受けたようである。また、日本NGOが取り組んでいる政府への提言、政府や企業との連携活動、企業の社会的責任の監視等は台湾でも大きな課題であるとの声も聞かれた。

驚いたことに、この会議は、台湾のNGOが一堂に会した最初の会議だという。これを機会に、台湾NGOが更に相互の連携と情報交換を深め、政府や企業との連携や相互チェックにより社会の透明性を高め、日本や韓国、香港等のNGOとの交流を進めていくことは、台湾の市民社会を一段と強め、東アジアでの民主化を進展させる方向に道を開くだろう。

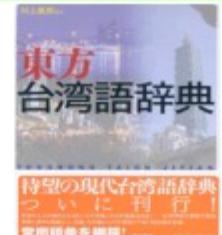
こういう進展の可能性を考えると、第一回の台日市民社会フォーラムは大きな意義を持ったと考えられる。この会議の事務を担当した台湾環境保護連盟の労に敬意を表したい。なお、この会議の議事録は『台日公民社会論壇—如何建構草根的連結』として、同連盟より公刊されている。

（文責：西川潤）

## 書評

### 『東方台湾語辞典』

砂岡和子



持続的現代台湾語辞典  
ついに刊行!  
専門語彙を網羅!

村上嘉英氏編著『東方台湾語辞典』が上梓された。企画から出版まで12年、まえがきにあるように、途中初稿データ消失などのアクシデントを乗り越え、高水準の台日辞書が出版された意義は大きい。本辞典を紐解けば、そのアップデートな常用語彙の収録率、初学者に配慮した言語情報の付与など、編著者と東方書店の辞書編纂ノウハウが凝縮した、使いやすくなるためになる辞書と納得がゆく。

方言に限らず複数の言語に通することは複眼的な世界認識の育成に益し、共生能力を磨く必修科目といってよい。まして台湾語（正確には閩南語、もしくは福建語）は中国七大方言のひとつであり、使用人口は两岸合わせて4000万以上、中国南方珠江デルタ地域と台湾の絆を取り持つ言語遺産でもある。福建人の経済活動の拡大につれ、閩南語は海南島や浙江地域でファンが増えているといい、少数言語の多くが消滅に向かう中、したたかな生命力を有している。筆者は現在この書評を北京で書いているが、大学内や街で耳にする中国語は話し手の出身や職業によってさまざまな地方なりを帯び、ナマリング中国語と日々格闘している。

中国方言中、もっとも古語層を宿す閩南語ではあるが、現在でも勢いを失わないその生命力はハイブリッドな言語使用に根源がある。広東人と異なり閩南語話者の8割が標準語も上手に話せる。台湾の政治家たちが国語と台湾語を器用に使い分けるのも、閩南語話者のマルチな言語感覚を敏感に反映したものだ。本辞書は閩南語に混じるハイカラな新語、レトロな日本語、そし

て独自の語彙を丁寧に収録し実用に役立つ。巻末の日本語索引は台語辞書としても重宝する。

欲を言えば辞書所収の常用語彙と会話の発音が聞きたい。方言音は本書のようにローマ字音注が適しているが、一般読者は記号だけを頼りに発音することは難しい。とくに音韻体系上は別項だがすでに同音となつた声母bとmやjとlなどは閩南語母語話者にとっても検索がやっかいだ。実際の音声を確認してみたい。CD-ROM作成はコストがかさむなら、近年は音声を計算機上で合成ができる。安徽中科大訊飛信息科技(<http://www.iflytek.com/>)では標準中国語、台湾国語、広東語が聞ける。閩南語も合成可能だ。もう一点は語彙に定量的記述が欲しい。語彙頻度、語彙間の親族関係、語用上の環境特性など、近年の辞書編纂はコーパスによる統計的記述が主流である。

本書評を書くにあたり、北京大学の閩台同窓会の学生諸君に辞典を見てもらい、討論の場を持ち、関連データの提供を受けた。閩南語に対する政治的立場は、やはり两岸で異なったにも拘らず、共通母語集団としての“血縁”的濃さに心打たれた。閩台青年たちと知り合う縁を得たのも『東方台湾語辞典』のお蔭と感謝したい。(早稲田大学政治経済学部教授)

## 書評

**丸川哲史『台湾における脱植民地化と祖国化—二・二八事件前後の文学運動から』**  
(明石書店、2007年8月)

橋本恭子



本書は丸川哲史氏が2006年度に一橋大学言語社会研究科へ提出した博士論文をもとにしている。論旨は明快で、非常に読みやすい。焦点は台湾における1947年の二・二八事件から1949年の四・六事件に至る時期の文化状況である。従来の台湾研究はこれを閉塞状況として描き、現在の台湾社会のあり様を深く規定している統独イデオロギーや省籍矛盾の起源として位置づけてきた。丸川氏はこうした歴史叙述に疑義を差し挟む。陳映真らの雑誌『人間』グループおよび横地剛氏の近年の研究成果を踏まえつつ、丸川氏はそれが実のところ国共内戦にかかわる小春日和というべき時期に相当し、比較的自由な言論空間が持続されていたことを明らかにした。新聞の文芸欄や文学作品をつぶさに読み込み、この時期、大陸から入ってきた進歩派知識人と台湾人の知識人が協力して、脱植民地化と祖国化を目指そうとしたこと、しかしその過程で矛盾や齟齬が生じたことなどを丹念に追っている。特に興味深いのは、台湾人作家楊逵と大陸から来た知日派知識人雷石榆の取上げ方であろう。楊逵が外省人と台湾人の若い世代を結び付け、台湾と大陸の新文学運動を接続させようと努力する一方、雷石榆の論調には奴隸化論を根拠にした国民党主流派の文化政策とは別の、台湾の歴史的独自性

を考慮に入れた「祖国化」の可能性が垣間見えるといふ。

知識人の間に省籍を超えた協力関係を読み取ろうとする丸川氏の視点は、あらゆる社会現象をエスニシティの矛盾だけで説明しようとする、現在の台湾に支配的な歴史観を相対化する。同時に日本人読者に向けては、反日の中国・韓国、親日の台湾というステレオタイプの欺瞞性を解体する。さらに戦前の台湾を研究テーマとしている筆者には、日本の台湾統治は決して敗戦を境に終ったわけではなく、戦後にも深い傷跡を残したこと教えてくれた。こうした数々の貴重な視点を備えた本書は台湾研究者だけでなく、一般読者にも読んでほしいと思う。

最後に気になった点を一つだけ挙げておく。丸川氏は『人間』グループや横地氏の仕事を何度も繰りかえして高く評価する一方、例えば、近年提出された二つの博士論文、徐秀慧の『戦後初期台湾的文化場域与文学思潮の考察(1945~1949)』(2004年7月)、黄恵禎の『左翼批判精神的継承: 四〇年代楊逵文学与思想的歴史研究』(2005年7月)など、この分野の新しい研究成果には全く触れていない。こうしたフレームの狭さのためか、残念ながら本書は全体的に『人間』グループや横地氏の切り開いた地平の内部でしかものを言っていないような印象を与えてしまう。丸川氏自身がいうように、今後、「さらなる資料発掘と多方面からの議論を積み重ね」、より広い視野に立った考察を展開していただければと思う。

(一橋大学言語社会研究科博士後期課程)

## 近刊紹介

『人権への道 レポート・戦後台湾の人権』  
『迎向世界的台湾NGO/Taiwan NGOs Reaching Out to the World』

西川潤



台湾の民主化の過程で、政治犯救援や環境保護を土台とした人権運動は大きく強まり、今日、台湾は世界で最も人権問題について活発な動きを見せている国の一である。また、同じくこれらの運動から市民社会が強力に出現し、その政治的表現としての民進党が権力をとるに至った。人権や市民社会について近年報告がまとまって出てきたことは、現代台湾の骨格を理解するために、歓迎される動きである。

『人権の道』は、民進党政府の下で2001年末に総統府ギャラリーで「台湾民主人権回顧展」が開催されたが、この展示資料を基に2002年北京語で出版されたレポート『人権之路』の日本語訳である。1981年に、米国で教えていた数学者陳文成は家族と共に帰省した時、国民党特務に

逮捕され、慘殺されたが、本書は陳文成を記念して設立された「陳文成博士記念基金」の企画、出版によるものである。

本書は、「戦後台湾人権史年表」とその概説に始まり、「白色テロ」「受難の物語」「人権への道」「人権救援」の四部に分かれている。これらの部では時代の証言者たちを集めた編集委員会が、「弾圧と反抗」の歴史にほかならなかった国民党統治時代の悲惨な虐殺、迫害、ありとあらゆる形で人間性を貶める尋問や拷問、そして厳しい監獄と収容所の生活、その反面、ねばり強く繰り広げられる人権擁護と連帯の運動等に関する第一級の史料を並べて、民主、人権、自由の重要性を訴えている。最後の章「人権の展望」は、台北二二八記念館や緑島人权記念公園等、平和博物館の紹介とその意義の説明で終わっている。

本書の延長線上に總統府で人権諮問委員会が『人権立国』(2006年)報告書を作成し、台湾で国家人権委員会、人権基本法を制定する必要を勧告していることに触れておこう。人権を強化する闘いは更に国内の弱者や差別、貧困に目を向けて、現在も続いているのである。

『台湾NGO』報告書は、財団法人ヒマラヤ基金会が編集して、外交部NGO国際事務委員会の手で発行された最初の台湾NGO白書である。華英両文で説明があるので読みやすい。人道救援、ボランティア、親善交友、民主人権、女性の人権、環境保護の6分野にわたり、78のNGOがリストアップされ、それらの活動が紹介されている。研究機関や支援財団の紹介もあり、便利

である。

台湾ではNPO(住民団体)は、内政部の非営利民間団体委員会に登録をし、外交部のNGO国際事務委員会では、海外で活動を行い、外交部の助成対象となるようなNGOをリストアップしている。もっとも評者が2007年9月に同委員会でインタビューしたところでは、日本のような政府とNGOの定例協議は未だ行われていないとのことであった。台湾の市民社会は現在勢いよく発展途上であり、それぞれの分野で活動を展開しているが、日本のNGOが力を入れているような開発教育や政府のODAや環境政策、また企業の社会的責任に関する提言はこれから課題と見受けられる。だが、そのためにも、このNGO白書のような基本的データの整理はおおいに役に立つだろう。

(台湾研究所顧問)

## 近刊紹介

### 『東アジアの社会運動と民主化』

「台湾研究叢書」の第2巻として、姉妹編の第1巻『東アジアの市民社会と民主化』(2007年2月刊)に続き、本書が10月末に出版される。

本書は台湾研究所と中央研究院アジア太平洋地域研究センターの国際共同研究の産物で、民主化の進む東アジアで社会運動は民主化とどう関わりを持ったかを調べたものである。第1巻では、東アジアの民主化の動因が市民社会の形成、発展にあることを示した。この第2巻では、市民社会がいかなる社会運動を通じて民主化を進めたか、を分析している。そのため、第1

部では台湾、韓国の市民社会が推進してきた環境保護、宗教、先(原)住民等の運動を扱い、第II部では外国人労働者に対して市民社会がどのような態度をとってきたかを、台湾、韓国、日本で検証し、その成熟度を調べている。第III部では、東・東南アジアについて市民社会と中間層の異同、タイやカンボジアでの非都市住民による民主化社会運動の実相を検討した。

(明石書店刊)

## 『貿易自由化と東アジアの農業』

経済のグローバリゼーションが農業生産の国際分業化を強行しつつある。

工業と農業の間の生産性格差大きく、市場的な効率性を基準として資源配分がなされるとすれば、農村の規模は年々縮小せざるを得ないのが現状である。

農業は国民の食料安全保障に関連した基幹産業であり、農村工業により雇用創出、環境保全、景観維持などの社会的な機能を担う。農業は自由貿易の進展により切り捨てられるべき比較劣位の産業ではない、との基本認識を共有して早稲田大学台湾研究所による日台国際共同研究「自由貿易時代の東アジア農業・農村」が2005年から行なわれている。

台湾・淡江大学、韓国・漢陽大学、山形県高畠町で日本、台湾、韓国、中国の9人の学者が参加して、研究発表と討論が行なわれた。成果は「自由貿易に立ち向かう東アジア農業・農村」(仮題)と題し、藤原書店から今年度内に出版の予定である。

(藤原書店刊)

## 台湾文化週間開催



台湾研究所では、早稲田大学創立125周年記念行事の一貫として、台北駐日経済文化代表處・台湾資料センターの協力の下、「台湾を知ろう」というテーマの下で、台湾映画の上映会・伝統芸能の紹介・学術シンポジウムの開催などを企画しました。この機会を通じて日本にとって最も身近な隣人・台湾の多面的な理解が深まることを願っています。

10/27, 28

「台湾研究をめぐる日台若手研究者の対話」

10/27~11/2

日台友好写真展

10/31

台湾原住民文化・歌

10/29~30

台湾映画祭

企画の詳細等については以下のURLをご参照下さい。

<http://www.waseda.jp/prj-taiwan/index.html>

早稲田大学 台湾研究所

〒162-0041

東京都新宿区早稲田鶴巣町  
513

早稲田大学研究開発センター  
120-1号館4階401号室